

知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】平成 26 年 7 月 11 日（金）

午後 1 時 30 分～3 時 30 分

【会場】富士宮市民文化会館 2 階 小ホール

1 出席者

- ・ 発言者 富士宮市において様々な分野で活躍されている方
6 名（男性 3 名、女性 3 名）
- ・ 傍聴者 133 人

2 発言意見

	項 目	頁
発言者 1	母力向上委員会の活動報告	3
2	地域防災活動推進委員会の活動報告	5
3	酪農教育ファームについて	12
4	地酒、乾杯条例について	13
5	障害者福祉、子どもの健全育成や防災について	17
6	ニジマス学会、富士宮 PR について	20
傍聴者 1	子どもを育てる環境について	26
2	世界遺産センターについて	30
3	芝川町について	34
4	子どもの食の安全性について	34

<県知事挨拶>

皆様、こんにちは。台風を少し心配いたしましたけれども、どういうわけか大きな被害が予想されていたにもかかわらず、全くありませんで、胸をほっとなでおろしているところでございます。天竜川佐久間ダムの渇水、あそこは大雨である程度埋まればいいなと思っていたら、見事に埋まってくれまして、渇水も解消されたということでございます。

ただ台風一過、すかっとすればいいんですけれども、大変湿って暑いという中で、皆様方、家でお暮らしになっていらっしゃるべきところをお越しいただきまして、100名を超える方がお越したということで、今日は県のために、また市のために御尽力賜っております県議の先生もこの会に御臨席いただきまして、どうもありがとうございます。

実は昨日から東部に入っております、いわゆる移動知事室ということで、沼津のあたりを見てまいりまして、今朝、朝一番でこちらの方に参加しまして、この移動知事室というのは、朝から晩まで、県庁の中に知事室というのはあるんですけれども、そこで仕事をすることもありますが、基本的には皆様方の生活とか産業とか、そうしたものをよくするために仕事をしているので、現場に出てお話を聞くということでございます。

そうした中で、今朝は一番に北山の方の富士カプセルという、実は医薬品ですね、カプセルで飲むと飲みやすいでしょう。日本一なんです、静岡県が。そのいわば創業者が七十数年前にいらっしゃって、今3代目なんですけれども、そこで新しいカプセルのつくり方を見せていただいて、その後、このたび富士宮に富士山世界文化遺産センターができるということになりまして、厳正な審査の結果、9つの応募の中から富士宮が選ばれ、大社さんのすぐ近くにできることになりました。

しかも、坂茂さんという方が、応募された中で厳密な審査の結果選ばれたんですけれども、その2日後に坂茂さんの建築というのはノーベル賞級ということで、世界のプリツカー賞という、我々はプリツカー賞に選ばれたから彼を選んだんじゃなくて、立派な先生方が選んでいただいたらプリツカー賞に彼が選ばれたという、大変な建築それ自体が人を引きつけるというようなものが、やがて姿をここにあらわすということであります。

そして、富士宮はいわゆる世界文化遺産の構成資産が静岡県で一番多いところで、今日は白糸の滝を見に行ってみました、一番心配していたのは、やっぱり多くの人がいらっしゃると。そうすると中国人、韓国人、それから欧米の方々がいらっしゃるわけですが、そういう人たちにちゃんとガイドができるかなと。もう日本語と英語と中国語とハンデルが全部書いてあって、もうガイドが非常に統一された形になって、手洗いもどこに出

しても恥ずかしくないようなものが白糸の滝にできました。

また、白糸の滝にございましたいわゆるお茶屋さんですね、そういうところがお志が高くて、建てていただいてそこが展望台になっています。本当に素晴らしい。富士宮市民の方たちが、それぞれ市のリーダーシップと地域の方たちとが心をあわせて、これを世界の宝物としてどこに出しても恥ずかしくないようなものにしていこうということで、そういう整備が着実に進んでいるというのを見てこちらに参りました。

途中、実は介護センターといいますか、「ひより」というところに寄ったんですが、そこもまた子宝率というのが静岡一なんです。働きながら子供を産まれる女性職員が静岡県下でトップです。実際2位なんですけれども、トップと言いたいようなところなんです、そういうところを見てきて、そしてこちらに来たということでございます。

広報と広聴というのがありますね。私は今日は今だけしゃべって、あとは静かに皆様方の御意見を聞きます。ですからここで言われて、聞きっ放しにしませんから。ですからここで決められることは決めてしまう、あるいは持ち帰って、検討した上で、そして必ずお返事を差し上げます。そういうふうにいたしまして、富士宮の今抱えている問題、あるいは富士宮でモデルになるようなことがありますれば、それを我々が、部長も来ていますので、いろいろと御宣伝申し上げるといような、そういう形になっております。

今日は先ほど司会者が申しましたとおり、この富士宮のそれぞれの分野におけるリーダーの方たちが来ていただいておりますので、御意見を承るのを大変楽しみにして参りました。2時間、外は暑いので、案外ここに来られてよかったのかもしれませんが、2時間充実した時間になりますように御祈念申し上げまして冒頭の挨拶といたします。本日は誠によろしく願いいたします。ありがとうございます。

< 発言者 1 >

よろしく願いいたします。母力向上委員会の発言者1と申します。

私たちは2008年に発足いたしました市民活動団体です。何をしているかといいますと、「妊娠・出産・子育てをプラスにする生き方の提案」ということをしております。私自身が妊娠・出産・子育てを通して大きな壁にぶつかりました。そして周りのお母さんという話の中で、やはりお産を機にいろんな喪失感ですとか、大変な思いをされている方が多いということで、どうしたらお母さんたちが幸せになれるか、笑顔になれるかということで母力向上委員会、お母さんとしての力をアップさせていこうということで活動を始め

ました。

私たちが最初に大切にしたのは、お産を語る会というものです。なぜかといいますと、2008年当初、この富士宮地域でお産をする環境が大変変わってしまいました。出産できる施設というのが病院数も減ってしましまして、お母さんたちが出産難民、全国的にも出産難民という言葉は多かったんですけども、この地域でもやはりお母さんたちがお産に対する不安、それから発生するさらに子育てに対する不安というものを大きく抱いた時期でした。

お産というものを肯定的にとらえることができないと、その先の子育てにおいてもお母さんたちが肯定感を持ったまま進むことができない。それが子供に対して乳幼児虐待ですとか、産後鬱ですとか、そういったものの温床になってしまうのではないかということで、まずお母さんたちが自分たちでどうすることができるのか。

私たちお母さんたちには、病院を増やすことですか、医者をふやすということはできないんですけども、お母さんたち自身が意識を変えて、自分たちが自分たちで安心して産むことができる、そして安心して育てることができる心と、それからコミュニケーション能力、行動力というものがつくることができるようにと思い、お産を語るということを始めました。

お母さんに必要な力はそのほかにたくさんあります。ですので毎月1回から2回、勉強会やイベントを通して、いろんな方たちと地域のネットワーク等を組んでまいりました。そうした中で私たちがいろんな方に出会う中で感じてきたことは、お母さんに必要な力って何だろうと思いつながら進んできたんですけども、とてもお母さんたちに必要だなと感じたのが「自己肯定感」というものです。

私たちいろんなイベントをやりながら、お母さんたちの感想を聞きますと、「こんな私でもこんなことができるんだってわかりました」、そんな声が聞かれるんですね。「こんな私でも」という言葉は、お母さんなのにもったいない、子供を育てているお母さんが「こんな私でも」と言っているということは、そのお子さんがやっぱり「こんな自分が」というふうに自己否定的になってしまうんじゃないかなと思ったんですね。なのでお母さんたちには「自己肯定感」を持ってもらいたい。そうすると子供たちが健やかに育つだろうと思いい、私たちはお母さんたちが「自己肯定感」を持つためのきっかけの場づくりというものをしてまいりました。

例えばフリーペーパーを地域に発行したりですとか、あと年に1回大きなイベントとし

で地域の方とか企業さんと協働して集まる場を開催しています。それから保健センターですとか、そういったところ、行政ともコラボレーションして、お母さんたちの声を直接届けることができる場所というのをつくっています。

現在実は静岡県というのは消滅可能性都市と言われている、将来都市が人口減少によってなくなってしまいうースト2と言われている。そのうちの9都市が東部に集中していると言われているんですね。富士宮市は幸いなことに出生率というのはトントンで、そんなに大きな増減もなくきているんですけども、やはり高齢化は進んでおりますので、私たちが高齢者の方も安心して住めるためにも、子供たちを安心して産みながら、人口が減らないように頑張っていきたいななんていうふうに考えています。

ですので県の方には安心して産み育てることができる医療環境をぜひ整えていただきたいと思うとともに、そのために私たちに必要なのは、やはり女性に寄り添ってくれる助産師さんの存在だったりいたします。現在、助産師養成所は、県中部と西部のみにしかありません。東部にもあったらいいな、なんていうことも考えております。

それからお母さんたちが生き生きと活躍できるような働き方、多様な働き方ができるような場をどんどんとつくっていただけたらいいなと思っております。要望ばかりではこういったものというのは成立していかないの、私たちは引き続き当事者の意識というものに働きかけながら、お母さんたちが自分たちで自分たちのことができることができるきっかけの場というものをつくり続けていきたいと考えています。

ですので、こうした市民活動に対してもぜひ御理解、御協力をいただきながら、お互いに強みを生かして、安心して産み育てることができる環境を静岡県富士宮市につくっていただきたいと考えております。以上です。

< 発言者2 >

皆さん、こんにちは。自分は富士宮市の防災指導員の本年度県の地域防災活動推進委員会の委員をやらせていただいております発言者2です。よろしくお願いします。

防災とは何か。災害を未然に防ぐことですがけれども、しかし自然災害、台風、地震、火山火災、火山噴火等、人間が防ぐことができない災害が起こったときに、被害をどれだけ少なくすることができるのか。それが防災であり、皆さんが取り組んでいる防災訓練の目的だと思います。しかし、個人のできる防災には限界があり、自助共助の大切さ、重要さを理解してもらおうのが防災指導員の役割だと理解しています。

富士宮市では阪神淡路大震災で多発したクラッシュ症候群、倒壊家屋の下敷きになって、長時間強い圧迫を受けると、心不全や急性腎不全になることが明らかになり、早期の救出の必要性がクローズアップされました。そこで、富士宮市が取り組んだのが、近所同士で目印を出し合えば、いち早く安否確認ができ、効率的な人命救助につながるのではないかと考えたのが、皆さん御存じの「我が家は大丈夫！黄色いハンカチ作戦」。

この作戦は、災害時、震度5強以上の地震があったときに、我が家は大丈夫だから、ほかの人を助けてください、助けてほしいという目印として、道路から見える場所に黄色いハンカチを掲げ、安否確認を短時間に容易に行うもので、これが「富士宮方式」と言われ、県内外からもこの「富士宮方式」という「黄色いハンカチ作戦」が取り入れられるようになってきています。

しかし、3年半前ですか、3.15の県の東部地震の際には、震度6強という地震が観測されたんですけども、このときに黄色いにハンカチを掲げた家が少なかったというのが、これからの課題の1つになってくると思います。

このときにも夜遅い時間だったんですけども、安否確認で高齢者の家庭を訪ねて行って、声がないのでドアをたたいて、「大丈夫ですか」と安否確認のために声をかけに行ったら、「何だ、こんな夜中に」というふうに反対に怒られたと、そういう経緯もありますけれども、できるならそれを早めに出していただければ、その家には行かないで、ほかの家を確認する。そういったことがこれからの課題になると思います。このときにもハンカチが掲示してあれば、そういう問題もなかったんじゃないかと。

問題点といえば、第三次被害想定が東海地震の被害想定として出されていたわけなんですけれども、今回三連動の巨大地震による被害想定、第四次被害想定、発生頻度が比較的高く、発生すれば大きな被害をもたらす地震・津波をレベル1、それから発生する頻度は極めて少ないんですが、発生すれば甚大な被害をもたらすあらゆる可能性を考慮した最大クラスの地震・津波レベル2、この2種類、2つの地震に応じた想定をする。

このとき知事が確か言ったことだと思うんですけども、「想定外だったということがないような被害想定を出します」ということで、第四次被害想定が発表されたわけなんですけれども、内容を見て、当富士宮では危惧されているのが富士川河口断層帯という日本で今断層が2,000個ぐらいの活断層が発見されているんですけど、その中でも危険度と、それから大きさですね、規模の大きさではトップクラスと言われる富士川河口断層帯の被害想定がその中に組み込まれていなかったというのが、富士宮に住む、ましてや防災関係に

携わっている自分としてはちょっと意外だったなというのがあります。

確認されている規模の大きさからいっても、予想されている震度が7、マグニチュードが8クラスの大地震が予想されているという富士川河口断層帯。阪神淡路のあの大きな地震でも7.2、首都圏直下の地震も同じく7.2から3ぐらい、それよりもはるかに大きいマグニチュード8という地震が、これは海溝型のフィリピン海プレートと、大陸の断層と連動しているんじゃないかなという観測というか、構造的に連動しているんじゃないかと言われている活断層がある。それにもかかわらず、被害想定がされていなかったということがちょっと意外だったなというのがありますので、できればそれを対応できるようにしていただきたいと思います。

ほかにも富士山火山を危惧されている富士宮市内の住民の方々が、地震よりも富士山の噴火が心配じゃないか。富士山の火山のハザードマップ等も出されて、各戸に配付されていますので、それらの説明も自分らの仕事ではないかと思っ、これからも取り組もうとしています。これからもできる限り防災指導員としての役割を務めていきたいと思、るので、よろしくをお願いします。

< 県知事 >

発言者1さん、発言者2さん、どうもありがとうございました。御両人とも大変大事なお話をしていただきまして勉強になったわけですが、人口が減少しているのは静岡県だけではなくて、日本全体ですね。それで出生率というので、合計特殊出生率という難しい言葉がありますが、女性が10代の後半から40代まで、何人お子様を産むかということで、それを毎年集計いたしまして出すわけです。それが平均して2.07人産めば人口は減らないですよ。ところが日本は1.43人しか産まないというのがつい最近出た数字です。

そうした中で静岡県は1.53人なんですよ。富士宮市は5年前1.53人だったんです。5年ごとに国の方から集計値が出るんですが、1.59人に増えたんです。ですから伸びているんですね。だけど1.59人だとやはり人口は減っていきます。

それからさらにもう1つは社会流出というのがあります。人口の出生率が一番低いのは東京なんですよ、1.0と言っていいです。一番高いのは沖縄で2に近いんですね。東京が一番確かにたくさん人口が住んでいます、1,300万人いらっしゃいますから。そこが子供を産みにくい環境らしくて、人口減少の足を引っ張っている最大のところです。

静岡県は平均して今1.53ですが、その平均を上回る形で富士宮市は1.59です。しかし

上には上があるもので、何と裾野市が1.8以上になりました。前は1.6人だったのが1.8以上になった。長泉町も1.8以上になったんです。ですからもう裾野市が1.6人だったのが、5年たって1.8人になりましたので、これであと0.2増えれば2.0ですから、東部には発言者1さんみたいなそういう人がいるんでしょうね、女性で。妊娠・出産・子育てがしやすいようにどうしたらいいかということを考えている人がいるに違いないというふうに思います。

そしてそうしたものが底力になって、彼女が母力と言われましたけれども、子育てをしやすい環境をつくり上げているんだと思いますが、これはやっぱり仕事をしながら子育てをするのはなかなか大変なので、仕事の場所で子育てが応援されているかどうかというので、全国で初めて私どもは企業の子育て子宝率というのをを出しまして、そのトップが今さっきナンバー2と言いましたけれども、静岡県ではここにありまして、先ほど言いましたひよりというその従業員の方々の女子の方たちの出生率が2.0なんです。モデルなんです。

ただ、しかし今おっしゃったように助産師、看護師が少ないですよ。恐らく発言者1さんは看護師の資格を持っていらっしゃると思いますが、助産師、看護師を増やしたいということで、私ども東部に県立の東部看護専門学校というのがありますので、そこに助産師の学科といいますか、それを設けるための検討に入りました。なるべく多くの方たちにそういう資格を取ってもらうということが大切です。

一方、企業もお子さんを育てる環境をつくってほしい。今日ここに企業に従事されている方いらっしゃるとは思いますけれども、どうしてお母さんが、例えば1歳ぐらいになって赤ちゃんをおんぶして職場にいて悪いんですか。前そうだったでしょう。特にこちらの商店街なんかは、皆おかみさんもご主人も一緒に働いて、そしておんぶしながらお店を回したりしていたじゃありませんか。

それがサラリーマン化して、全部保育所に預けなくちゃならぬというのが当たり前だと思っているのは私は、当たり前じゃないと。だからおんぶしてギャーギャー泣くのは、子供が元気な証拠だから、みんなであやせばいいというふうに思っているんですけど、それを富士宮から始めてください。その母力をこんなことで迷惑かからないようにしたいじゃなくて、当たり前だと、子供が泣くのは。そういうふうにはできないものか。そうすると働きながら子育てができるし、子育てほど大切なものはありませんでしょう。一番大切なのはみずからの子供でしょう。

この子供をしっかり育てるとするのは最も大切な仕事だと思います。自分よりも立派になったら、もっとうれしいじゃありませんか。頼もしい息子、娘になったりしたらうれしいじゃありませんか。これほど大切なものはありません。学校の先生だけに任せておくものじゃないと思いますよ。ようやくお母様自身が立ち上がろうということで、そういう母力を上げるチームをつくってくださっているということで、発言者1さんの言っていることはもっともだということで、今日女性の方もいらっしゃるし、男性の方も、ここからよし母力向上委員会の委員、あるいはサポーターというふうになっていただきたいと、私はサポーターになります。

それから、自己肯定ということ、もう当然です。母親が自己肯定をしなければ子供に悪いですよ。だからしっかり自分を持って、自分の最良のものを子供に差し上げる必要があります。そういうふうに自己肯定を持って当たり前だということです。もう子供が産まれたただけでも、これはもうすばらしい神様の贈り物で、肯定するに値すると思います。

それから発言者2さんから、消防団で今富士宮市消防の指導員をなさっていただいていると。静岡県全体で消防団員が2万人ほどいらっしゃいます。こういう立派な人がいらっしゃるんですよ。ところが、消防団は皆発言者2さんみたいにたくましい立派な男性というそういう固定観念があるでしょう。しかし、生活しているのは皆一緒に、力仕事はできないかもしれないけど、分業すれば女性だって仕事できますよ。サッカーだって女性までしこすごいじゃないですか。野球もあります、ボクシングも、昔は相撲まであったというでしょう。これからもやるかもしれませんけれども、とにかく男がやることの女ができないということではないでしょうというのが今の世の中で、非常にたくましい。

だから消防団員だってできると。今何人いるか、300人ちょっとしかいないですよ。2万人いる中で300人しかいない。せめて10人に1人はということで、だから2万人なら2,000人、まずは富士宮市の消防団は10人に1人は女性となれば、私はこの黄色いハンカチ作戦のそのことについて敏感なのは、男よりも女ではないかとすら思います。そういうわけで、はいと言っていた。

市長さんに今日は直に白糸の滝、あそこにもし地震が起こると、店が被害に遭いかねないので、何とかそれを安全なところへ移そうというようなことでございましたけれども、一部それにちゃんと理解をして協力してくださる人がいて、これは本当に大したものですよ。なかなかできることじゃありませんが、それをやっていただいて、それを直に御説明いただいたわけでした。

ともあれ、そういう災害については備えをきちんとしなくちゃいけないということで、先ほどおっしゃった黄色いハンカチ作戦、この富士宮方式というのはいいですね。黄色いハンカチといえは映画にもなったし、よかったですね。涙が出て、黄色いハンカチで皆に無事を知らせると。まずは自助、これは共助ですね、黄色いハンカチは。我々が公助でいけるのは、やっぱり7時間以内に行かなくちゃいけないんですけれども、どうしても時間がかかります。ですからまずは自分を助ける、あわてないでみずからを安全に保って、そして隣近所で助け合って大丈夫だと黄色いハンカチ、こういうわけですね。そういう運動はみんなで共有していかなければならない。

前回こちらで総合訓練をいたしました。そういうときにもう少し徹底していればよかったかなというふうに思うんですが、それから第四次被害想定は、やはり今回は東日本大震災というものがあって、津波で2万人ぐらいの方たちが行方不明になったり、命を亡くされた。僕たちのところも、わずか5分以内で第1波が来ると。しかも11万人ぐらいの人が、何もしない場合には犠牲者になりかねない。日本全体で三十数万人の人たちが犠牲になりかねないと言われているんですから、それは津波に対してどうするかというところが、ちょっとそこに視点が行き過ぎた形があります。

しかし考えてみれば、宝永の噴火のときも、あれは地震と連動していた。そういえば3.15富士宮で地震があって被害が出ました。そういうことからすると、太平洋側における地震と富士山の噴火も関わるんじゃないかということで、我々は富士山の噴火も複合災害として勘定に入れよう。今は山梨県、神奈川県、それから静岡県がついにこの9月には御一緒にそれを想定した上での防災訓練をすることになりました。

少しずつですけれども、それからまた富士川河口の断層というのも存じ上げておりますが、これも想定と言えは想定で、これ御指摘があったので、その場合どういう被害が起こるかということは考えておくべきことでしょう。

ちなみに私どもこの第四次被害想定というのは、1,000年ないし1,500年に1回起こるとされているそういうものです。先ほど首都圏の直下型を言われました。この首都圏直下型の想定を皆さんしっかりしたものをごらんになりましたか。あれはマグニチュード7の想定で、向こう30年間で70数%の確率で起こると言われている。この間の関東大震災は幾らでしたか。マグニチュード8じゃありませんか。なぜそれを想定しないんですか、実際に起こっているにもかかわらず。だから私は担当者に聞きましたよ。「そんなにすごいことを言ったら東京がパニックになる」と言う。

東京がパニックになる。こちらは1,000年、1,500年に1回のもので起こるということを想定して被害想定を国がなされた。東京については、実際に90年ちょっと前に、1923年ですから、ちょうど91年前に起こったものについて、それより想定を低くしてやったらパニックが少ないのでということで、もうこんなダブルスタンダードは私は許しがたいと思っているんですが、それはそれです。

ですから、その被害は幾らでも、例えば富士山が山体崩壊をしようとしている人がいるでしょう、学者で。山体崩壊はあり得ます。それから、あるいは宇宙から隕石がぶつかってくる可能性だってあります。実際ぶつかってきて恐竜が全部全滅したんですから。そういうものを想定することは頭の上では可能ですよ。だけどどうしようもないこともありますよ。だけど今は我々は今日考えられる最大の想定、第四次被害想定、マグニチュード9、そして第1波が5分以内に来る。下田あたりでは33メートルの津波が襲いかねない。ほとんどのところで10メートル以上の津波が来る。これに対してどうするかということで、向こう10年で被害を8割減らすということでやっているわけですね。

ですから、ありとあらゆることは想定することはできますけれども、我々の人知を越えた自然の働きがあるということもあわせてどこかに持ってないといけないと思いますね。それはそれとして持っている必要がある。どうしてもしようがないということがどこかにはあると思います。しかし、富士川河口の断層については科学的に言われていることですので、また同時にプレートテクトニクスと言われるフィリピン海のプレートと、それから太平洋のプレートと、ユーラシアのプレート、これがぶつかっているのがこの静岡県でありますので、それがずれますと、どうしても大きな変動が起こる。しかも富士山が噴火するのはそれと連動しているということがあるので、しかしそれが作り上げている景色の美しさというのもあるんですね。自然が生きているから。

大体南アルプスなんかは毎年毎年0.3mm隆起しているんですから、同時にエコパークです。また伊豆半島などは、下でマグマがボンボンやっているから幾らでも温泉が出てくるわけです。だけど群発地震が起こります。ですから両方だと。恵みもあれば、残念ながら脅威もある。脅威については、想定内、つまり想定外のものが起こることが想定外ということでもあります。しかし今日は、もっと想定内にしておくべきことについて言われましたので、ありがとうございますと申し上げて、この富士川河口の断層についての想定についても、しっかりと御報告申し上げるようにしたいと存じます。以上であります。

<発言者3>

こんにちは。はっきり言って僕はただの酪農家です。なぜここに呼ばれているか、全くわかりません。着慣れないスーツを着て、こんなに大勢いる、普段は牛がいっぱいいる中を牛乳を搾っている本当にただの酪農家です。ただ、うちではほかの酪農家と違うことをやっていると言えるのは、うちは酪農教育ファームを実際にやっています。

この酪農教育ファームは、子供たちを実際に牧場に呼んで、牛に触ってもらって、牛乳を搾ってもらう。あっ牛乳ってこんなに温かいんだな、牛ってこんなに優しいんだな、それを感じてもらおう。その中で食と命の勉強をしてもらうということをやっています。

実際に全国的に見ても、個々の農家でこういう活動をやっているところは多いですけど、僕らみたいに体験組合をつくって学校を受け入れる、なおかつ大勢の人数が集まっても、必ずクラスが各農家に分けられる。このシステムができているというのは、この地域だけ、はっきり言ってこの富士宮だけです、全国で見ても。

実際に今需要があるというのは、静岡県の学校も確かにあるんですけど、東京の世田谷の学校、神奈川の横浜、千葉の浦安など、教育委員会に実際に視察に来てもらって、学校に実際に酪農教育ファームの牧場へ来てもらって、しっかり子供たちにその学校では教えられることを、僕らみたいなただの酪農家が教えてあげる、それをやっています。

ぜひ知事をお願いしたいことがあるんですけど、学歴、勉強も確かに大事です。勉強ができなければ、いい大学に行けないし、いい会社にも行けない。だけど、こういった農業体験、実際に酪農だけじゃなくて、漁師、漁業の体験だったり、家事の体験、お茶の収穫、水田の体験だったり、いろんな体験ありますけど、ぜひ静岡県の学校の子供たちに、県がバックアップしてもらって、ぜひ食育の県、静岡を食育の県として全国にアピールできるようなバックアップが欲しいなと思っています。

もう1つ、うちでは実は去年、知事は覚えているかどうか、ちょっとわかりませんが、中部日本ホルスタイン共進会といって牛の品評会、5年に1度の大会だったんですが、実は静岡では8部門のうち6部門でトップをとって、なおかつその4部門が富士宮がとった。恥ずかしながら僕も農林水産大臣賞をいただいて、頑張っている中で、ただ農家が頑張ったんじゃない、静岡県の関係の方々や、富士宮市の農政課の方々、農協の各団体の皆様、いろんな人のバックアップがあって、「チーム静岡」としてそういう結果がとれた。僕一人では間違いなくこれは簡単にはとれなかったと思います。

実は来年5年に1度の全日本ホルスタイン共進会、北海道であります。ぜひ静岡の酪農

のレベル、これが全国にも、北海道にも通用できるレベルだということをもっと全国に知ってもらいたい。静岡の酪農というのが、レベルの高い酪農をやっているんだということをもっと広めたい。そういうこともぜひとも県の中でも協力をしていただき、もう1度来年「チーム静岡」をつくって、日本全国に静岡の酪農というのは、規模としたら北海道には勝てませんが、酪農自体はすごくレベルの高い酪農をやっているんだということをもっと全国に知ってもらいたい、そういった思いがありまして、ぜひ協力をしていただきたいなという思いがあります。簡単ですが、一応僕の話とさせていただきます。ありがとうございました。

<発言者4>

皆さん、初めまして、こんにちは。富士正酒造の発言者4と申します。

私たちは富士宮市の上野の地域で酒造りをずっとやってきたんですけれども、3年前から朝霧高原の方に蔵を移設いたしまして、そこで酒造りを現在観光蔵として行っております。皆さんに目に見えるようなものとして開放させていただいております。今年で創業148年目となりました。

そこで私は唎酒師の資格を去年取得をいたしまして、皆さんにお酒、地酒というものを伝えるべく、セミナー日本酒の会をさせていただいております。ちょっと富士宮ではオフアがないのでやらせていただいたことはないんですけれども、静岡市の方と、あとは裾野の別荘地の方で別荘の中で日本酒を楽しむという会を開催させていただいております。

その中で感じたことが、皆さんいつも飲んべえさんを対象にやっておりますので、飲んべえさんはよく見るんですけれども、新しいお酒を飲まれる方が本当に少ないです。今の私の年代だとほとんどいません。私の友達でもほとんどいません。まずはビールとか、ワインが飲めるんですと自慢される方とかいらっしゃるんですけど、県内35の蔵があると言われておりますけれども、その蔵を知っている方も少ないですし、自分たちの市にどういう蔵があるのか、こんな伝統の蔵があるということを知らない方も本当に多いです。それがとても悲しいかなと思います。

皆さん御家庭でお茶を飲まれている方は本当に多いと思うんですけど、皆さん静岡茶を飲まれているかと思えます。だけど、お酒はと言ったときに、ビール飲んでいるよとか、新潟の酒おいしいよねと言われてしまうと、地酒としての意味がちょっとなくなってきているのかなと思います。地酒はその土地でつくっているから地酒なのではなくて、その土

地で飲まれているからこそその地酒だと私は思っております。なので、その地酒を本当に自分の生活の中に取り入れてもらえるようになればいいなと思います。

富士宮市の中で乾杯条例の話をいただいたことがあったんですが、その乾杯条例も私は賛成派です。嗜好品なので強制的に飲めというわけではないですし、本当に皆さん好きなものを飲まれればいいのかと思うんですけれども、地酒をバックアップするという意味でも、まずは乾杯は日本酒でという定義が、市内だけではなく県内の蔵がある市にも伝わっていければなと思っております。

あとは、蔵をやっているとどうしても環境に目がいきます。お水が命ですので、米をつくる時にもお水が必要ですし、お酒をつくる時 80%がお水です。なのでそのお水は、私たち富士山の麓でつくっていることから、富士山の環境を私はとても気にしています。去年も登山客の方がとても増えましたけれども、登山客のマナーの方は向上したのかどうか。目に見えるものではないですし、私たちいつも遠くから見ているので、富士山はいつもきれいだなと思っておりますけれども、それがどのように改善されているのか、とても気になります。

冬の間も遭難事故なんかあったりして、朝霧高原の上もヘリコプターが飛んでいたりしていたんですけど、そのときも何でこういう悲しい事故が起きるのかなとか、ごみのマナーがそれこそニュースになると、何でこういうことしているのかなと心を痛めることが多いです。そのお水を使って私たちはお酒造りをしたり、ニジマスを育てたり、本当に地場産業を支えているお水だと思っております。

なので、それを市内だけじゃなくて、県内の方、県外の方にも発信できるような富士山を守るという意識を県内から県外へ飛ばすように、海外まで飛ばすように、もう少し意識して取り組んでいってほしいなと思っております。

< 県知事 >

お2人のお話、両方とも飲料に関わることで、ミルクとお酒ということで、子供のときにはミルク、大人になってからはお酒と、こういうことでございます。ただの酪農家、ただの酪農家というところからお話をお始めになりましたけれども、農林水産大臣賞ですからね、それはもうすごい酪農家なわけですよ。ものすごい自信を持っていらっしゃる、天下一だという発言者3さんです。

そういう人が富士宮にいるのは本当にありがたいことですね。1人じゃありませんから、

いろいろな酪農家がいらっしやることを存じ上げておりますけれども、農林水産大臣賞に輝ける方がいらっしやるのですよ。北海道はなるほど、これはもう明治になってから人が入植したところですから、広大な大地があって、そこに放牧されているわけですね。それと比べると人口が稠密な本州の中で、富士山の山麓でおいしい野菜を食べながら立派なホルスタインが育っております、おいしい牛乳がいただけるということで、これを子供にどういうふうにしてお乳を搾り、そしてそれをいただくかというのを体験させようということで、お若いにもかかわらず、本当先生ですね。

みんなで子供たちを育てよう、国語のできる子、それから乳搾りがよくできる子、算数がよくできる子、ものすごく走るのが速い子、どれが一番ですかと。どれもいいですよ。富士山の登り口がいっぱいあるように、子供が立派になるように、それぞれの自分の才能が、あるいは自分の好き嫌いがわかっている。

そしてその才能を伸ばしていく、それを助けるということが大人の役割で、大人も顔が違うように、職業が違うように、いろいろな道についているわけですから、いろいろな道をその子供の個性にあわせてやっていけばいいということで、これが社会総がかり、地域総ぐるみでの教育だということで食育大賛成で、一方で英数国理社というものに偏った今の教育ですから、それを是正するには、こういう農業とか、酪農とか、漁業とか、林業とか、工業とか、昨日も私は沼津工業高等学校に行きました。

高1、高2、高3の生徒さん、電気科、電子科、あるいは土木科、建築科、物質工学科とかございまして、それを皆国家試験を取ってやっているわけです。中には去年オランダに行って、世界大会で優勝したロボットで、ロボカップ、ロボコップの方でなくてロボカップ、ロボットワールドカップですよ。それで優勝してきた高校3年生にも昨日会ってきました。立派だと。ですからそういうメカに強い子、それからこういう生き物を相手にする。

特に生き物の場合は、毎日毎日、例えば田方農業高等学校に私は見学に行ったときに、高校3年生の子が高校1年の子を教えていました。そのときに例えば牛ですと、朝6時半に行って、春夏秋冬関係なし、そして乳を搾って、そしてちゃんと検査をした上で農協に出して商品として売っているわけです。これごまかしがきかないです。ですから、眠たいから行けないというのじゃなくて、相手が生き物ですから、そういうことをしているんですね。これは本当に立派な教育になっていると思っているんです。

そうしたものへの関心を小さなときから呼び覚まそうということで、子供たちにこうい

う酪農の体験をさせていらっしゃるのが発言者3さんで、立派な先生だというふうに思いますね。ですからこういうものをちゃんとカリキュラムに組めるように富士宮から始めたらどうですかね。というふうに思うくらいであります。

そういう意味で、量よりも質というか、量も大切ですけども、質がやはり一番大切だということだと思いますね。何と言いますか、安かろう悪かろうじゃなくて、やっぱりいいものをわかる大人、大人がわかると子供がわかるようになるので、いいものをわかるようにするということが大事だと。

カルシウム、タンパク質が大切なので、ミルクは今給食にどうしても出さなくちゃいけないものになっておりますので、私は米飯が進んでいるでしょう。米飯とミルクと合いますか。やっぱり米にミルクぶっかけて食べてもあんまりうまいものじゃないと思うので、幾ら発言者3さんのところの農林水産大臣賞のミルクでもお茶の方がいいでしょう。ですからミルクは10時に飲めばいい。2時間目と3時間目の間にミルクだけ。ミルクのおいしさだけで飲む。そして米飯給食のときには、できればみそ汁なりお茶というのがいいのではないかと。そういうセットもあわせて考えていく必要がある。

私なんかは脱脂粉乳で育った。学校の給食はアメリカのものを配られて、それを水で溶かして飲んでいたわけですから、本当に今の子供はいいと思いますよ。最近ではミルク好きになりました。しかしミルクよりも私は実を言うと、今のこの年齢ですと日本酒の方が好きでございまして、だからおっしゃるとおりなんです。こんなうら若き乙女がですよ、酎酒の名人だなんて言って、いや若い人もたのもしいねえ、味がわかりますかということで、やはり飲んだときにうまいなあ、五臓六腑に染みわたるときのその幸福感というのがありますでしょう。

しかも結婚式をするときにウイスキーでやる人がいますか。幾ら高いといたってコニャックでやらないでしょう、ビールなんかでやらないでしょう。やっぱり御神酒といいですか、ちゃんと日本酒でやるわけです。そして奉納するのは何ですか、日本酒ですよ。だからすばらしい日本の水を日本の米とあわせて、そして杜氏のすばらしい技術であわせたのが日本酒ですから、醸造酒の中でこれほどレベルの高い、これほど手間暇のかかっている醸造酒はありません。私はだから乾杯は、少なくとも新年を寿ぐ乾杯は日本酒ですべきだ。

しかも、今は日本酒を飲むためのグラスも非常にいろいろとありまして、こういう普通のコップみたいなものもありますね、グラスでできた。そういう大事なときの乾杯は、本

当に地酒ですというこの愛情ですね。

これは条例で決めて京都市がやっていますよ。それもいいですけども、当たり前にするにすればいいじゃないかということだと思っただけです。当たり前にするにすればいい。ちょっと口をつけるだけでもいいと。そういうふうにして、あとは好きなお飲み物をされればいいと。一番最初は自分たちの命の水、富士山の水、これを一生懸命すばらしい芸術品にした日本酒で、しかもこういう唼酒のできる名人がちゃんと等級をつけて出しているようなお酒をいただいた方が肌もきれいになりますよ。やっぱりもち肌になるには日本酒ですよ。そんなわけで私は日本酒党なわけですが、ですからもうこれからは富士正。

富士正はたしか『誉富士』を使っておられる。『誉富士』というのは静岡県産の酒米ですよ。通常は『山田錦』でしょう。これは加古川でつくっている。加古川というのは兵庫県です。御覧になるとわかりますけれども、酒米の『山田錦』というのは丈が高いんですよ。だから台風なんか来ると倒れちゃうでしょう。だから丈を低くした酒米を『山田錦』から品種改良してつくったのが『誉富士』です。ですからその名も静岡の水、太陽で育ったそういう酒米を使い、静岡の名水を使って醸造した日本酒で乾杯するというふうな文化を、条例と言わずにつくり上げていきたい。ですから今日ここにいらっしゃる人は、勇気を持って「乾杯は日本酒でしょう」と一言言われる。ただしそれは強制しちゃうと、日本酒でしませんか、じゃ日本酒でと。

そういうわけで、日本酒ですと小さいですからお腹膨れないでしょう。飲まない人については申しわけありませんが、そういうことでございまして、子供のときにはミルク、大人になってはおいしい日本酒を味わえるような、そういう文化をつくっていったらいいというふうに、発言者3さんと発言者4さんのお話を伺いながら思った次第です。ぜひ御賛同いただきますよう、満場の御賛同をお願い申し上げます。

<発言者5>

ただいま御紹介にあずかりましたNPO法人ヴィレッジネーション代表理事の発言者5と申します。どうかよろしく申し上げます。

当法人は福祉を軸に、子供の健全育成や防災について働きかけている団体です。まずは当法人の御紹介をさせていただきたいと思っております。ヴィレッジネーションの名前の由来ですが、村や小さなコミュニティを意味するヴィレッジ、あと想像を意味するイマジネーションから組み合わせた造語です。小さなコミュニティや年代を超え、想像することが大き

な原動力になり、全国民を巻き込みながらできるような団体になりたいという思いを込めております。

メンバーは福祉分野に偏らず、病院や一般職、販売など、さまざまな職に就いて、私を応援してくれる方がいらっしゃいます。そのためにさまざまな意見が出るということは、発想が豊かになるということで、できる人ができることをできるだけする精神で進めてまいっています。

このような団体をつくり上げるようなきっかけになったのは、私自身が13年前交通事故に遭いまして、一時的なんですけど社会的弱者と呼ばれる障害者を経験したことにあります。このことによって、社会に存在する障壁といいますか、壁にすごく気づきました。その壁をどうにか取り除くことができないかなということで、富士宮市の視覚障害者の移動介護支援者、通称ガイドヘルパーと呼ばれるものなんですけど、そういったボランティアを始めました。

視覚障害者の外出を補助する役割というような形だと思います。この私の髪型を見ていただいてもわかると思いますけれども、視覚障害者、目が見えませんが、見えない方が多いということで、なるべく人を触りたいということで、触っていただいてもいいように、ふわふわ、キュートな頭にさせていただいて、それを維持していると思っていただきたいと思います。

このガイドヘルパーを続けて10年ほどたちますが、思うことは、人との信頼関係がすごく大切だなと思います。視覚障害者がガイドヘルパーと行動するということは、その人に命を預けるということになります。安全はもちろんですけど、信頼できる関係がなければ成り立ちません。視覚障害者だけに言えることではなく、これは人間社会においてもすべて必要なのかなと思います。

話は変わりますが2011年3月11日、東日本大震災、今日で3年と4カ月が実はたつんですね。皆さんの記憶にもまだ新しいかと思いますが、未曾有の大震災に見舞われまして、多くの方が被害に遭いました。先ほどもちょっとお話がありましたけれども、その4日後にも富士宮市で震度6強の地震に見舞われました。

富士宮市では障害者世帯や高齢者世帯で家具の固定事業が進んでいるために、余り被害がなかったんですけども、唯一1軒視覚障害者の方で、仏壇が固定してなかったために仏壇が倒れまして、その前にあった食器棚を割ってしまって、避難所に行けなかったようなこともありました。

東日本大震災からその1カ月後、宮城県を仲間と訪ねた私は、高齢の視覚障害者の夫婦が40日間孤立しているという話を聞き、南三陸町に行きました。高齢の御夫婦は一時的に避難所に身を寄せたんですが、騒音や悪臭などによって体調を崩されました。そのために被害を免れた自宅に戻りましたが、避難所と違い、自宅では情報や救援物資が届かない日々を過ごしていました。

私たちは現地で、現地のボランティアさんの報告とともに、情報や必要な物資を毎月届けるようになりました。NPO法人ヴィレッジネーションを設立したのは、そういった活動を続けた2012年の3月1日、ガイドヘルパーを始めたころから考えていた福祉や防災に関わりながら、もっと幅広い活動をしたいということを思っていたことがきっかけになります。

同町に関わっていくうちに、ロンドンパラリンピック視覚障害者柔道の日本代表監督と出会いました。その縁で2012年8月、ロンドンパラリンピックの視覚障害者柔道競技を富士宮市内の子供たちと一緒に応援しました。子供たちと話してみると、障害者は弱いから助けてあげたいというイメージが強く、多くの意見がありました。

子供たちには視覚障害者の模擬体験をしてもらいながら、国旗に文字が浮き上がるペンで書いてもらったり、カラフルな色をつけた文字で応援メッセージを国旗に書きました。その国旗には、子供たちらしい意見で、香りをつけたらいいんじゃないかなということで、香りをつけたり、CDにメッセージを吹き込んだりして、視覚障害者にわかるような応援をしました。

応援を通じて、子供たちが抱く選手のイメージが、格好よくて強い存在に変わり、私自身も世界に挑む姿は地域や障害の有無を超えて、とりわけ次世代の励みになることを本当に学んだと思います。これからもこうした出会いの場を設けることによって、子供たちの未来の裾野を広げていきたいというようなものに考え方が大きく変わりました。

その思いは津波で被災した南三陸町の幼稚園と富士宮市内の幼稚園の交流事業に発展しました。鯉のぼりの共同製作や七夕祭りの短冊交換、運動会の応援メッセージを交換したり、卒園式ではメッセージ交換などをすることを提案して、一緒に行いました。そうした活動を通じて、子供たちの心の中に遠くの友を思いやる大切な気持ちを伝えることができたのではないかなと私自身は感じております。

このような当法人の活動を通じて、インターネットニュースを見た韓国の方から、子供の相次ぐ災害に当たりまして、韓国の子供たちにも被災地の経験や、培った防災について、

心構えを伝えてほしいということで要望がありまして、先月なんですけど3週間のプログラムを実施して帰ってきたわけです。

一方、富士宮市内での活動ですが、昨年に引き続きまして今年も富士宮市NPOと市民活動促進事業の採択をいただきまして、これまで得た福祉や防災のノウハウ、子供たちの健全育成の経験を、より市民に知っていただく活動をしています。

本年は8月23日の土曜日に、富士宮市駅前交流センターきららで「未来への生き方」をテーマに障害者の雇用コンサルタントをしながら、パラリンピック選手である視覚障害者柔道選手を招いたり、私の方で防災から得た生き方をテーマと一緒に学ぶ勉強会をしたいと考えております。ぜひ参加していただきたいなと思います。

このように障害者と健常者が交流する機会というのは必要であり、お互いを理解して、そして支え合うことがとても重要だと考えております。当法人は福祉のみならず、そこに重なる防災や子供の健全育成など、多様化しています。だれもが社会参加できるシステムが富士宮市民とともに生きる皆様に必要ではないかなと感じております。

このように活動を行う中、ぜひ知ってもらえる機会を今後もたくさんつくっていききたいなと考えております。御清聴ありがとうございました。

< 発言者6 >

発言者6でございます。私一番最後ということは、一番しゃべるから一番最後にされたんですが、今日は5分ぐらいで終わりにしてと言われたんですが、どうしても5分50秒ぐらいかかってしまいますので、皆さんお付き合い願いたいと思います。

今日はお話があんまり長くできないので、できるだけ自分の言いたいことを先に言った方がいいよっていうふうに言われましたので、まず1つお願いがございます。私ここ所属なんですけど、旅館の若女将と書いてございます。若女将と書いているというこの努力ということは、静岡県内ででき得ればプレスに名前が載るときに、年齢は書かないでもらいたい、そういう運動をしたいというお願いを1つさせていただきたいと思います。

皆さんずっとお話ししてきて、私は一体何物なんだろうというようなことを今ずっとここで座って考えていましたが、私は何だろうというときに、一口で言えば富士宮のPRをする人だと思っております。これはですね、PRをするというよりも、自分が富士宮が好きで、富士宮をばかにされたくない、この思いがすごく強いんですね。ですから、富士宮ってこんなところだということを知ってもらいたくてしょうがないということから、これが

端を発したということになります。

それですね、まず一番今関わっているのはニジマス学会ということでして、皆さんニジマス学会御存じかと思いますが、何でニジマスなんだというお話になったときに、やきそば学会は富士宮を、「富士宮」と言われたときに「どこにあるの」という、「ここですよ、富士宮はここですよ」という役目をしました。ですから今「富士宮です」と御挨拶すると、「ああやきそばの町ね」というふうに言われるようになったと思います。

次にニジマス学会が出た理由ですが、ニジマス学会は地域のブランドイメージアップのために出ました。何でニジマスかという話になりますが、ニジマスというのは、冷たい水が豊富にあるところでないといけない魚でございます。そうしましたときに、ヨーロッパの方々は「ニジマスがたくさん採れるのよ、うちの町で」と言うと、「すごく自然が豊かで、きれいなお水がいっぱいあるところなんだね」という認識です。世界の方はそういう認識なんです。ですからニジマスを富士宮の魚として世に出そうというようなことでニジマス学会というものをつくりました。ですからこれはもう世界戦略です。世界に対して富士宮がどんなにいいところであるかということをしてPRするためにニジマス学会は生まれたと思ってください。

で、私ども今一生懸命「ニジマス食べて」「ニジマス食べて」と言ってPRしていますが、地域の方は反応悪いです。申しわけございませんが、地域の外の方はすごく反応がいいです。今ANAにはニジマスが機内食で出ております。それを聞きつけて、もう関西の方の方は、大きなスーパーの方なんかは買い付けに来ています。それほどニジマスというものは今注目されています。

なぜかという、海が危ないと思っているから養殖、それもきれいなお水で育った魚ということで、PR度合いがすごく高いんです。ですから皆さんそれをすごく認識していただきたいですね。富士宮にいてニジマスを食べたことがないなんていうことを口にしないでいただきたいと思います。できれば富士宮でニジマスのお魚を食べていただければと思います。

そんなようなPRもしていますが、もう1つ私はPRしていることがございます。それは日本の独自の文化をお金にするべきだと考えておまして、日本の文化をどうにかお金にできないか。お金にできないかという言い方だと、ちょっとなあと思うかもしれませんが、日本の文化を世界の人に知っていただく。で、それを楽しんでいただくというようなことを富士宮でできないかと考えております。

その1つ、「きもの de 宮」というものを立ち上げましたが、着物で富士宮を歩いてください。これきょうは「ゆかた de 宮」ですので、私はゆかたを着てきました。今「ゆかた de 宮」を開催しております、富士宮のまちをゆかたで歩いてくださいというふうにPRしてございます。

その中で何で着物なんだという話になりますと、先ほど発言者1さんが言われた母力アップということになりますが、私どもは女力アップとっております。女子がゆかたを着て、着物を着て生活ができるということは、すごく日本人にとったら暮らしのこととして、それと着物を着たり、草履を履いたりすると、体幹が育つんですね。体幹が育つということは、皆さん立派な子供が産めるんです。ということで、女力アップということを皆さんにPRしてみたいんです。

ここで県の方が来ていますので、特に言っておきたいんですが、私エンゼルパワースポットが富士宮にございまして、杉田小安神社、浅間大社、田貫湖、この3つがエンゼルパワースポットでして、これをすごくPRしようと今策を練っている最中でございます。今雑ぱくですが、その策というのはですね、着物を着て、帯は富士山結びをして、その格好で浅間大社でお見合い写真を撮っていただこうと思っております。それを皆さんにPRして、そうしますとコノハナサクヤヒメに準ずるようなよい御縁談が舞い込みますよというような形のPRをしていこうと。

それと同時に、いい御縁談がございましたら今度は浅間大社で結婚式というような、そんなようなことで、杉田小安神社に行ったら子供ができるよ。そうしますと、先ほど言われたように富士宮の子供がわんさか生まれてくる、富士宮に行けば子供がどんどんできるようになる、御縁がつくというような、そんなようなことをやろうと思っておりますので、県の方に何とぞ協力をしていただきたいと思いますと思っております。

それともう1つは、お酒がさほど飲まれていないよということがありましたが、私どもの御商売としまして、お座敷を余り使う方がいないので、「御座識喰楽部」というのを立ち上げました。「御座識喰楽部」といいますと、お座敷の敷が知識の識なんですね。クラブのクラは食らうの食らです。ですから知識を持って皆さん大いに食べましょう、飲みましょうということとして、「御座識喰楽部」というのを立ち上げまして、会員証がここにございますが、こんなような会員証を皆さんに持っていただいて、「御座識喰楽部で川床やりますよ、集合」というようなことをやってございます。そのときには出てくる飲み物は日本酒以外は出しません。乾杯から最後の中締めまで、ずっと日本酒を飲んでいただくという

ようなことをやってございます。ですので、そんなことで私はいろんな方のPRをしていこう、富士宮のPRをしていこうというふうに思っております。

学校なんかでね、ニジマス学会のお話をしてくださいとって呼ばれることがございます。そういうときに子供さんに必ず言うのは、やきそばが有名になって、いろんな方が富士宮に来るようになりました。世界遺産になっているんな方が来るようになりました。そういうときにいろんな方が来るので、富士宮はごみがいっぱい落ちているねなんて言われぬように、皆さんきれいにしましょうね、川が汚くなったら、ニジマスが育ちませんというお話をしております。ですから、すべてのことが教育につながるとして、私は一生懸命富士宮をこれからPRしていこうと思っております。

<県知事>

お二人、発言者5さんと発言者6さんのお話を聞いたんですが、最初の4人の方のときもそう思いましたけれども、とにかく感心して聞きほれていたというか、すごいなと思って聞いていた次第でございます。言うことがありません。

というわけになかなかいかないんですが、発言者5さん御自身が交通事故で障害のある人の状況に想像力を働かされた。それがヴィレッジ・イマジネーション、ヴィレッジネーションと書いてあったから何か。ヴィレッジというのは村ですよ、ネーションというのは国ですから、よくわからなかったんですが、それをヴィレッジと想像力を、イマジネーションと一緒にしたのがヴィレッジネーションだということで、その中身をお聞きして立派だなと。

しかもそれを10年続けてこられたということで、10年1節というふうに言いますが、自分自身が皆さん振り返られて、10年前の自分と今の自分と、大分境遇が変わっていると思うんですが、それくらい1節としては十分な期間ですので、これを継続するというのは立派なことだというふうに思います。

真っ直ぐずっと行くと問題なんですけれども、竹に上下に節があるように、伸びていくときに10年ごとに大きな節目が出てくるのではないかというふうに思うわけです。この節目が発言者5さんのお仕事の中で、パーマをかけられて、いわゆる現代風だなというふうには、それについてコメントを差し控えるような気持ちがあったんですが、まあ視覚障害者の方に触っていただいて、これが発言者5さんだということがわかるようにしているので、もう本当に偉いというか、大したものだと。しかも格好いいから役に立っている

と思いますけれども、しかし見る人によってはこんな頭してと言う人もいるかもしれないですね。それを実はそれが気になっていて、本当にだれが聞いても感心する以外にないと。

そしてパラリンピックを通じて、今は韓国からもそういうお問い合わせがあるということなので、こういう人が富士宮に育っているというのは、いいまちだなというふうに思っていて聞いていたんですよ。そして発言者6さんにバトンタッチでしょう。もう言うことなしです。

有名な方であることは存じ上げておりましたけれども、こうして直に直接聞いて圧倒されるというか、大したものだと。しかし、ともかくやきそば学会でも大したものだと思っていたんですよ。何しろなかなかそんなブランド力というのは立てられるものじゃありませんか。これはまた非常にユニークな方を通して、一気に日本一のB級グルメ、B級グルメというそういうコンセプトまでつくっちゃったわけですから。

これはB級で私は世界をねらうんだといってニジマスだというでしょう。この志がもう本当に富士山ですね。日本一の富士山を世界に宝物にするというのと同じことで、しかもちゃんと理屈が通っている。ニジマスはきれいな水でしか育ててないから、そのニジマスを大事にするということを通して環境美化もするんだと。

そしてまた今日はゆかたがお似合いになっている。もう精神年齢は永遠の若女将という、そういう風情でいらっしゃるというふうに思います。

そしてゆかた、今日はそういう和風のお召し物の方が散見されますけれども、実はちょっと3人立ってくれますか、県庁の職員。向こう向いてください。これはちょっとだらしない格好しているでしょう。ところがこの胸ポケット見てくださいませ。それ出してくれますか。これ扇子なんですね、扇子。この扇子でいわゆる省エネやっているわけです。扇子のあれが違うでしょう。これでセンスを上げているわけですよ。

実はここに全部マークがついています、富士山の。ですから静岡県というのをこのロゴマークで、これ商標取ってあるんですよ。そういうふうにして、これ「サムライ・シャツ」ということで、普通ですと扇子はこんなふうになります。これがこう入るようになってるんですよ。ですから、これは普通の洋風ですけども、和風を何とか入れ込んで、しかもこれは遠州木綿です。土地のものなんですよ。だからこれ木綿ですから、すごく肌触りがいい。伝統の木綿ですからね。だけど、いきなりゆかたとかこういう格好で県庁に行くわけになかなかまいりません。

そこがいいところが女性ですよ。富士山結びというのは、今富士山結びされているんですか。ともかくそういうものもあると聞きまして、縁結びというところに結びつけ、そして母力という、女子力アップで母力アップだ。ちゃんと円環でつながっている。

そして縁結びが実は大切で、今縁結びをしてくださる人がいなくなっているでしょう。「あいちゃんは太郎の嫁になり」という歌があるじゃないですか。「でしゃばりおよねに手を引かれ」というふうに、その「でしゃばりおよね」がいなくなったわけです。ですからなかなか見合いというのが、かえってしにくくなって、そして出会いのきっかけがなくなって、残念ながらいい出会いを適齢期のときに見逃してしまうというようなことが起こって、そして晩婚、未婚ということになって、男の方は全部草食化していくという。

それは発言者6さんだけじゃありません。こんなにしっかり者の女将なら全部任せられるじゃないですか。そういうようになっていくんじゃないでしょうか。そうすると初めから年上女房をもらった方がいいじゃないかと。そうすると自分が年上で、嫁さんが年下だと自分の方が偉いと思って威張りくさって、結果的には威張れないような状況がいっぱいあって、結果的に嫁さんの尻に敷かれるということになるなら、初めから尻に敷かれればいいということで、少し年齢を重ねられている女性も、年下を鍛える、母力で子供を鍛えるように、旦那を鍛えるようなつもりで、今草食系をぜひ若女将に鍛えていただくと。そういう男が上で、女の方が下、大体1歳年上の女房を見つけるのは金のわらじを履いて見つけろと言うぐらいでしょう。

だから年齢のことも一切関係なしに、いい縁結びがここならできるということでエンゼルスポットを選ばれましたけれども、選んでもそれをちゃんとソフト力で上げる人がいなくて困っていた。いらした方が多くなってきたのもしいと。そしてこれでこの母親力を上げるためのそういうチームをつくられておりますし、仮に障害を持って生まれてきたというときにも、発言者5さんのような優しい心を持って、きっちりと国際的にも通ずる仕事をされている人がいらっしゃるし、ミルクを飲んで育てば元気になるし、お酒を飲めば楽しいし、言うことないじゃないかと。何か、もしあれば、もうちゃんとかういう防災力の名人もいるから、全部そろったなど、もう言うことなしと、100点満点の富士宮です。感心しました。どうもありがとうございました。

<発言者1>

再びのチャンスをありがとうございます。今皆さんのお話を伺いながら、本当に、私今

回こちらにてお話をさせていただく機会を与えられたことを両親ともども喜びながら、それでも初めて知事に何をお話ししたらいいのかと思悩んだんですけれども、とにかく周りのお母さんたちから日々の思いを届けてこいということで、背中を押されてやってまいりましたが、皆さんの世界まで見据えた活動をお聞きして、本当にすごい場に来ることができて幸せだなと思いました。

私たちが富士宮はじめ、静岡県というのは本当に産み育てるにはすばらしくよい環境だと感じていますので、このまま安心して安全な妊娠・出産・子育てをするためにも、静岡県では本当に平和の維持ですとか、それから安全な環境として原発も抱えている県でもありますので、そのあたりの安全に関しても、県の方にはしっかりとした指針をつくっていただきまして、これから次世代が安心して本当に過ごせるような環境をつくっていただきたいと考えております。

<傍聴者 1 >

先ほど知事は、子供が職場に来ていいと言いましたよね。それでいいと思いますか。子供を預けてくるということはよくなくて、子供が職場に来ることをいいと言いましたよね。それでいいと思いますか。

<県知事>

今待機児童というのがありますでしょう。待機児童というのは、保育園に預けられなくて、困っているお母さんのことでしょう。そしてお母さんが子供が保育園に預けられる、それを待っているんです。だけど、保育園に預けられた子供はだれを待っているのでしょうか。

<傍聴者 1 >

母親です。

<県知事>

そうでしょう。だから本当に必要とされているのは、お母さんがそばにいることだと思いますね。ですからお母さんがそばにいられるような環境をつくるということの方が待機児童をなくすことになるというふうに考えます。

<傍聴者1>

でも仕事に支障が出ると思います。

<県知事>

えらいことです。だけど、それは仕事にもよるとは思います。

<傍聴者1>

もし県庁で2~30代のお母さんが子供を連れてきて、子供と遊んでいた場合、仕事はだれがやるんですか。

<県知事>

私の知事室は開けっ放しになっているんですが、そこで赤ちゃんができて、それこそ最初の半年くらいはつきっきりでなくちゃいけないと思いますけれども、おんぶしても出てこれると、風邪も引かなくてすむような季節にはおんぶして出てきて構わないと言っているんです。

<傍聴者1>

そうなんです。そうすると子供はやっぱりお母さんがそばにいればお話したいですし、一緒に遊んでほしいとか、望むと思うんです。そうするとお母さんのお仕事が進まなくなってしまうと思うんです。

<県知事>

そうですね。少しこれは皆で協力しなくちゃだめでしょう。

<傍聴者1>

ですね。そうすると支障があると、やっぱり困る人がいっぱい出てくると思うんです。

<県知事>

そのいっぱい困る人が出てこないように、お互い最初の子供が産まれたときは似た状況

を持つわけですから。

<傍聴者 1 >

ええ。何十人というよりも何百人という人が県庁にはいると思うんですよ。1人で2人か3人子供を連れてきたら、県庁の中を走り回っていたら大変なことになると思うんですけど。

<県知事>

それで、私はもう県庁の職員の方々のアンケートをした上で、この秋には県庁の中に託児所をつくります。今度西館に、本館があって西側のところにちょうど水が使えるところがありますので、そこを開放いたしまして、私は自分の部屋を開放すると言ったんですが、5階なのでちょっと大変だということで、西館の2階を託児所、しかしそれは県庁の職員だけではありません。近くでお仕事されている方もいらっしゃるだろうと。その方たちをお預かりするというので、そして1回それをやってみて、実際いろいろな企業でも、企業の中にそういう託児施設をお持ちになって、お母さんが時間があれば見に行ってくると。そしてそれはやっぱり職場の仲間がお互いを理解していると、ずっと10年も20年もじゃありませんからね、小さな子供がしばらく大きくなるまではそういう年齢を各個人は持つ。それを皆で理解しましょうということですよ。

<傍聴者 1 >

でも富士宮でそういったところってないんですよ。

<県知事>

とりあえず私は今そういう考えを持っているんですよ。とりあえず県庁で、確かに県庁には数千人の人が働いていますが、若いお母さんの中にはいらして、家で育てることもできますけれども、職場にも預けるようなそういう託児施設をつくるということで合意ができたので、1回ちょっとそれを見ていきたいと思います。仕事に本当に支障を来すのかどうか。

<傍聴者 1 >

かなり支障出ると思います。

<県知事>

ありがとうございます。もう支障が出ないように一生懸命私も頑張ります。

<傍聴者 1 >

話を聞いている範囲だと、かなり知事は無責任だなと思いました。

<県知事>

はい、すみません。それで今のように工場だとか会社にお父さんが仕事に行く。今お母さんも仕事に行く。そういうようになったのはせいぜい過去 100 年ぐらいです。それまでは家で仕事していたわけですね。家で仕事しているということは、そこにお父さんとお母さんと子供も一緒にいるということです。

<傍聴者 1 >

そうですね、自営業はそれができるんです。

<県知事>

そういう農業を中心にした自営業、副業としての織物とか、そうしたものを我々はずっと 1,000 年以上やってきたわけですね。そういうような経験があるので、何かもう子供は託児所に、あるいは保育園に、そこに預けるのが当たり前だと思っているのは大間違いとは言わなくても、今の時代の通念で、昔からそうしなくちゃならないという問題じゃないと。子供を中心に考えましょうということですね。

<傍聴者 1 >

今は農家をやるよりも、仕事に出て働くお母さんの方が多くなっていると思うんですね。パートでもいいですし、契約社員でも、社員でも、皆さんそうなんです。そうするとやっぱり低学年の子供は早く帰ってしまいます。

<傍聴者 2 >

富士宮の宮町から来ました傍聴者2と申します。今日は県知事さんと初めてお会いするわけですが、いつもテレビではイケメンの県知事さんに会ってますけど、きょうは知事さんが来られるというので、私は県に対する質問を考えてまいりました。

では世界遺産について聞きます。先ほど坂先生が今度設計いたしまして、40億のお金をかけてモニュメントをつくるというお話をいたしましたね。何で40億もかけて富士宮にそんな建物をつくるんですか。何の目的でつくるんでしょうか。今度の文化遺産というのは、世界自然遺産がだめになったために文化遺産に格下げになったんですよ。そのために今度40億もする建物を建てて、その維持管理費を市民税で、我々の市民の税金で管理しなければならない。どういうためにそんな立派な逆さ富士のような建物を建てるんでしょうか、それをお聞きしたい。だからその世界遺産が40億も何で金かけるのか。こんな貧乏な県ですから、富士宮市に幾らかでも病院とかそういうところに回してもらいたいから私は質問しているわけです。何で40億もかけるんですか。まず1点それを聞きたい。目的もです。

<県知事>

世界遺産というのはですね、3つのカテゴリーがあります。世界自然遺産、世界文化遺産、複合遺産です。そこで上下関係はありません。格下げではありません。

それから日本には今20弱の世界遺産があります。一番最初になったのは、世界自然遺産として屋久島と、それから白神山地のブナ林ですね。自然です。しかし行かれたことはありますか。

<傍聴者2>

行ったことはあります。

<県知事>

そうしますと、屋久島にはビジターセンターがありますでしょう。あれはどうしてあるか御存じですか。これはですね、なぜそれが世界自然遺産であるかということを訪れる方たちに説明する義務が生じるからです

ですから遺産センターというのは、遺産に登録されると必要な施設になります。そして今度の場合には世界文化遺産になりましたが、これは決して格下げではありません。そもそも富士山というものについて、我々は、我々というか日本の政府は「富士山」というふ

うにして登録したんです。これは英語で書かれています。

そうすると昨年の6月22日にカンボジアのプノンペンユネスコの世界遺産委員会におきまして、これでは意味が十分に通じませんと。富士山というのは、次は英語ですが、シークレットプレイスでしょう。シークレットプレイスというのは聖地でしょうと。そしてソース・オブ・アーティスティック・インスピレーション、芸術的な景観の源でしょうと。ですから富士山というタイトルにこの2つをつけて正式の登録名にきなさいというように、世界ユネスコ委員会から日本の代表団に言われたんです。

つまり、富士山というのはシークレットプレイスというのを日本の政府は「信仰の対象」と訳しましたけれども、シークレット、聖なるプレイス、場所ですから聖地ということです。それはエルサレムだとか、ローマだとか、あるいはメッカだとか、同じだと言ったわけです。それは単なる自然の対象じゃないでしょう。

それからソースというのは源ですね。芸術的な源泉の源でしょうと。それは私たちに言ったんじゃないくて、海外のイスラム教徒の方も、仏教徒の方も、キリスト教徒の方も、皆いらっしやる中で、そういうふうなものが富士山でしょうと。つまり信仰に関わるもの、それから見て感動するもの、そういうものとして人間の文化の、人類の文化の遺産ではありませんか。ですからそれがわかるように「富士山ー信仰の対象と芸術の源泉」、これが正式なタイトルです。言い換えると、これは世界文化遺産、単なる自然の山というか、土塊じゃないんですよ。それがいかに多く富士宮の人を中心に日本人を励ましてきたかということですね。ですからこれは誇りに思っていると思います。

と同時に、一旦これを世界遺産として認定されれば、それがどうしてそうなのかということ、これを内外の方々にわかるように、しかも子供たちにわかるように示す施設をつくるのが義務になります。そしてどこがそれをつくるかということで、どこでもよろしいから応募してくださいということで、そしてまた応募してきたものを、それこそ文化勲章をもらうような方たちを委員として選んでいただいて、そしてそれが一番ふさわしいのがあそこの場所だということです。

そしてそれらはいいい加減なものをつくるというのではなくて、だれが見てもすばらしいというものをつくるために、いわば内外に公募したわけですね。どんなものがよろしいですかと。そしてそれがまた100幾つあって、厳選されて最終的に選ばれたのが、先ほど言いました坂さんのものだったわけです。

ですから人類の宝物を、なぜ人類の宝物ですか、日本人はそれをどういうふうにしてき

ましたかと。浅間大社ではあそこの富士山曼荼羅というものもありますでしょう、これ国宝でしょう。そうしたものがわかるように、なぜ三保の松原からずっと上まで描かれているんですか。なぜコノハナサクヤヒメが飾られているんですか。なぜいろんなところに修験道のものがあるんですか。それはそれぞれ富士宮においても、須走においても、あるいは吉田口においても、それぞれ歴史持っています。富士山は広大な存在ですから、法隆寺なら法隆寺という単体です。姫路城なら姫路城という単体です。

富士山は日本で最大の山で、かすみの裾を遠く引くと、つまり裾野が広大である。つまり範囲が大きいので、山梨県側も1つお持ちになり、こちら側も持つというふうにしましょうということになりまして、私は富士宮の人たちはそういう富士山について学ぶには、ここがいいと言われたことを誇りに思っていた方がいいと。

それは富士宮の方々の負担というより、今富士山をどうしたらいいかということで、入山料というふうに言っていますけれども、協力金のようなものをいただいています。それだけではありません。ふるさと納税というのがあります、今それがものすごい数来ています。例年の7～8倍来ているんですよ。私はそれにお返事を書いているわけですが、それは富士山の保全に使ってください、富士山に関わる形で使ってくださいと、日本じゅうの人たちが励ましてくれているんです。

そして何と申しますか、そのお金をこっちに使え、あっちに使え、じゃ全部こっちに持ってきているわけじゃありません。人間の健康、人がいてこそその富士宮であり、人がいてこそその静岡県であり、人がいてこそその日本人が大事にされてこそその日本国でありますから、日本人のためにどうして使ったらいいかという中で、私どもは富士山についても使わねばならないと。

<傍聴者2>

そうしますと、あそこに博物館的なものをつくるわけですか。芸術的なもの、文化的な博物館をつくって、それを観光に来た人、バスに乗ってきた人に見てもらって、それで浅間大社さんにお参りしていただくと、そういうあれですか。

<県知事>

それについても、どういう機能を持たせるかということにつきまして、この世界遺産委員会の先生方、国際的な学者が4つか5つぐらいの柱を立てました。伝える機能、保存す

る機能、それからまた楽しむ機能、交流する機能、こうしたものは少なくとも持たないといけませんということで、それに応じた設計をしていくということです。ですから単に普通の博物館というよりも、それを富士山が見えなくても、ここに来てよかったねと、来てわかるというふうなものをつくるということですね。

<傍聴者2>

それについてはわかります。で2週間ぐらい前に浅間大社にすごく大きな文字で落書きが書いてありましたね。知事さん、知っていますか、大きな落書きが。それを富士宮市長さんが警察に届けたと。市民一人一人がこの世界遺産を大事にしなければいけない。県民一人一人が世界遺産を大事にしなければいけないときに、そういうばか者がいるわけです、この市には。非常に残念で僕は涙が出ました。こんな卑劣なやつがいるのかと思いました。知事さん、どう思われますか。

<県知事>

同じ気持ちですよ。ですから心ない人がいます。そしてそれに対して残念だと思う気持ちは一緒です。ただ、富士山は我々の先人たちが大事にしてきたものでもあり、我々が大事にするべきものでもあり、それから我々の後世の人たちも大事にしていだけるように、我々はそれを伝えていかなければなりません、それは富士山が見えないところの方、例えば北海道にしる、九州にしる、決して見えませんね。だけど見えないけれども、そういう人たちが富士山について思いがないと思われませんか。思いがありますよ。

なぜか。そもそも利尻富士とか、津軽富士とか、九州には薩摩富士とかね、つまり富士山というものを大切に思う気持ちは日本中にみなぎっているわけです。ですからそういう意味で、全員にとっての、万人にとっての富士山です。そういうものをたまたま近くで持っているから、今おっしゃったようにみんなで大事にしていこうということになります。

<傍聴者2>

非常に大きい問題なんですよ。この世界遺産というのは、1年半ごとにイコモスに届けなきゃならないですね、結果について、こういうようになっていきますと現状は。それは知事さん御存じだと思いますけれども、今度の落書きについても当然届けなければならないと思いますよ。例えばドイツのドレスデンで世界遺産になった物件があるんですけど、資

格停止で世界遺産でなくなったことがありますよ。そのこと御存じですか。ドイツでもそういうことがあるんです。富士宮でもそういうことがあっては困るんですよね。だから市民1人1人が世界遺産の尊さを考えて、これからも行動していかないと困ると思うんですよね。

<傍聴者3>

芝川地区の傍聴者3と申します。今芝川町は「花子とアン」で、その花子の娘婿が芝川町から出たという大変今注目されている芝川町なんですけれども、県でそれをちょっと大きな仕掛けを持って知らしめていただきたいというのと、それと内陸フロンティアの何か指定地域に、その構想に組み入れていただけないかなというのをお願いしたいと思います。

知事さんから見まして富士宮市って色に例えるとどんな色に見えるんでしょうか。それと香りとか匂いにしますと、富士宮ってどんなふうに感じられるのかなということを私は知事さんのお考えを聞きたいなと思いました。何しろ富士宮は本当に大変いいまちですので、ぜひまた富士宮のことをよろしくお願いいたします。

<県知事>

興味深い御質問ありがとうございました。富士宮、どんな色か。水色、虹色、輝いているようですね。香りは清潔な香りですね。

<傍聴者4>

市内で自然農法といいますか農業をやっています傍聴者4といいます。

公の場で話をするのは初めてなんですが、実は2006年スローフードの世界大会に、本部からの要請で静岡有機茶会議の代表として、約80名の方に、皆さん御存じでない方も多いと思うんですが、スローフードの世界大会というのは偶数年ですから、今年秋9月の末か10月初めあたりに約1週間、荒川静香さんがメダルをとりましたリンク、あれは新しい建物なんですが、あの隣にフィアットの元自動車工場の跡地で、イベント会場とかホテルとかショッピングモールがありまして、そこを会場にして世界中のいろんな農産物、建物のスローフードですから、ファーストフードに対して、つまりまともなものをまともに食べましょうというイベントがあるんですが、私たち会の事務局が女性だということもありまして、業界の反発があるかもしれないというので、ローカル新聞にも一切発表しないで、

80 人に約 450 煎のお茶を提供してきましたが、私は知事さんをお願いしたいのは、子供たちに食べさせるものを、ぜひより安全なものを食べさせてほしい。

先ほど最初の女性の方も言いましたし、あるいはその国の未来はその国の青年を見ればわかる。もちろん青年は子供ですから、その子供たちにぜひともより安全なものを食べさせてほしい。細かいことは言いません、あえて。残念ながら平均的日本人はその専門家の意見はいろいろですけれども、一生の間に 200 キロ、300 キロの化学合成物質を体の中に入れてしまっていると言われていています。ですから、これを解決すれば、もちろんすべてそんな簡単にはいきませんが、相当の成人病、あるいはアレルギー、アトピーは治るし、それを現実実践している私の先輩もいます。ただの自然農業をやっている農家です。

ですから、細かいことは時間の関係上申しません。質問があれば、どのようなことでもお答えはしますけれども、とにかく子供たちに安全なものを食べさせてほしいということ。

市長さんも見えているので、あえて私ここで言うんですが、白糸の滝のすぐ南側に、昭和 17 年開校の静岡県立の農業高等学園というものがありません。そこが閉校になるということのを伺いまして、実は無謀にも計画書を持って、こういうことに使いたいので貸してくれないかと聞きましたが、もちろんいいですよとは言いませんでしたが、いずれどういう方法か処分するなら、内々に管理費は出せないけれども現状を維持してくれればということで、私が 3 年間管理させてもらいました。

私がこういうことに使いたいと言ったのは、子供たちのための食農教育体験学習です。先ほど酪農家の方も言われましたように、残念ながら私も約 10 年間、国際ワークキャンプを全面的に受け入れてきましたが、ヨーロッパ、アメリカの人たちに比べて日本の青年は、残念ながら、これは我々大人の責任ですけれども、未熟さといいますか、農業ということに対する、ましてや農業に関して言えば、農家自身がこんなもうからない仕事を子供には絶対やらせないと、嫌なことしか話さないわけですね。私は自分で勝手にこじつけに聞こえるかもしれませんが、3 K 3 K とよく言われましたが、私は貴重な仕事を気楽にやって感謝されて、こんないい仕事ないんじゃないかと、お天道様の下で、自然のリズムにあわせて。

ぜひとも子供たちに、もちろん皆さん大人にもですけれども、安全なものを食べさせてほしいということです。余りにも今我々が口にしているものがまともでないということです。今日本人、私が聞くところによると、1 人当たりのお米の消費量が 1 日 1 合以下で、ほとんどが仏教徒の国で、お彼岸とかお盆にお墓参りに行く方がどれだけいるか知りませ

んが、クリスマスにケーキだ、バレンタインデーだといって、ちょっとおかしいじゃないですか。

これは商業ベースでやっているということはわかりますけれども、やっぱりおかしいということはおかしいと言っていけないと、せっかく大吟醸なんていうおいしいお酒があるのに、私も有機のオンリーワンの酒米をつくって、お酒をつくってもらったことがあります。ぜひ日本というこんなすばらしい国に生まれたことを世界遺産ともども、日本食も世界遺産になりましたので、私はできれば富士宮市内に、山梨側でもいいですが。

< 県知事 >

今のお話はすばらしいまとめになっていたんじゃないかと思えますね。静岡県には富士宮も含めて農作物がたくさんできます。そうした農産物がどういう種類のものがあるかということについて私は調べました、皆さんと御一緒に。そうすると農作物だけで 339 あります。これはつい最近までだれも知らなかったんです。カロリーベースで何パーセント自給しているということしか言ってなかったから。そして海産物もあるでしょう、海がありますから。合計すると 439 です。そして第 2 位は鹿児島県で半分以下です。218 ぐらいしかありません。ダントツで多いんですね。

ですから、それは傍聴者 4 さんのような名人が本当に心と手間暇をかけてつくっているもので、ほとんど芸術品ですね。ですから農業芸術品で農芸品とっていいと。だからこうしたものを子供たちに提供する必要があるということです。そしてバランスよく食べられる。春夏秋冬いろいろなものが手に入るということです。子供の食事に家庭で、そしてまた給食でそういう献立をつくって出していくということを通して食育をしていく必要があるということです。ですから食育は算数や国語や英語や理科と同じくらいに、そういう重要性を持っているのだというふうに思っています。

そしてこれからはそういうことの元になっていく農業とか漁業とか林業とか、これは農業経営士とか、林業一家をなす林家ですね、漁業経営士という人を顕彰して、恐らく傍聴者 4 さんも農業経営士ではないかと存じますけれども、プロフェッサーです、英語で言えばですね。そういう立派な人を社会の教師として、その人たちの意見を聞きながら子供たちのために食育にそれを活用していくと。学校の先生なんかはもっと知っていただきたいというふうに思えますね。

ですから今の一番の元は食ですから、食が豊かで、なぜ食が豊かという、水がきれい

だから。水は太陽とあわさると植物をつくり上げるわけです。きれいなお花をつくります。ですからお花の数も 700 もありますよ、品目だけでね。種類をすると 1 品目に 100 品種ぐらいありますから、7 万種ぐらい静岡県は花の王国です。食材の王国、花の王国ですよ。ですから食の都、花の都、お茶の都というものをつくっていこうじゃありませんか。

そうしたものを私たちの生活の中で使うというか、それが和食です。自分たちが自分たちの旬の物をいただくというふうにしていく、それをできる限り子供たちのことを考えてやっっていこうという御提言でしたから、大変いいお話を承った。スローフードの日本代表だということですから、傍聴者 4 さん、健康に気をつけて頑張ってください。